大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十一卷　第一號

昭和十年七月一日發行

論叢

民族の周流……文學博士　高田保馬

官吏と課稅……法學博士　神戸正雄

部落協議費の研究……經濟學博士　汐見三郎

時論

輸入割當制に關する一理論……經濟學博士　谷口吉彥

研究

ベルギイ・フランの切下に就いて……經濟學士　松岡孝兒

商業生產說の諸性格……經濟學士　松井清

ディーチェル公債論の發展……經濟學士　島恭彥

說苑

產物方について……經濟學博士　本庄榮治郎

海外移住民考……經濟學士　青盛和雄

ワールの農業經營集約度概念について……經濟學士　小泉所

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

經濟論叢
第四十一卷 第一號 (通卷第貳百四拾壹號) 昭和十年七月發行

論叢

民族の周流

高田保馬

一

支配的地位を占むる民族は早晩その地位を、新興の民族にゆづる。これは有史以來の民族興亡史の示すところである。而して、前者の沒落はつねにその優越そのことから來る。優越そのことの故に社會的に優越者たる資格を失ふか、人口學的に漸次に衰亡してゆく(前號所載の如く)。此興亡代謝の過程を更に立入つて考へてみよう。

かつて述べたるが如く、優越せる民族の沒落は主として、その利益社會化による、而して新に優越的地位に高まりゆく民族の上昇はその共同社會的氣風による。かくは云ふものの、すべての

民族が一樣に早晩優越的なる地位に上昇し得るや、といふにさうではない。云はゞ、文化の發達程度に於てあまりに低き民族は、漸次に消滅する運命をもつてゐる。このことは、少くも近代文化と接觸を保つてゐる所の、數多の低級民族に認めらるるところである。これは種々なる事情に基く。

低級民族が文化の程度の高い民族と接觸するとき、前者は後者から見ると餘りに弱者である。政治的には餘りに抑壓せられ、經濟的には餘りに絞取せられる。過度の壓迫によつて彼等は十分に高度なる文化を吸收するだけの餘力を有しない。從つてその武力によつて優越的地位を獲得するが如きは、彼等の夢想だにもし得ざるところである。彼等はかくして、永久に低き生活と過度なる强制の下に繫がれる。更に重要なる事象がある。彼等は屢〻從來の住居を逐はれて不便且つ不毛の地にうつる。さうすると、生活の困難は其人口の減少を餘儀なくする。少くも壓迫民族の人口の著しく增加する間に、其人口は少しも增加しないことも少くない。その上、文明との接觸によつて欲望は增加する、資力がそれにつれて增加せざるが故に、生活の壓迫は加はり、人口の增加が許されぬ。加之、生活樣式の變化、ことに完備したる醫療によつて病菌の作用をくひとめたる文明人との接觸によつて、疾病にかゝるものの、免疫性なき身體の抵抗は弱く、醫療の費用を有せず、又養生の知識を缺くが故に、其死亡率は高まる。かくして彼等は屢〻滅亡するか、人口の極度の減少を見る。

かるが故に、新に優越せる地位に上るものは、低級の民族ではない。云はゞ中庸の地位にあるところの民族のみが十分なる條件の具備するのをまつて、かゝる地位に立つ。民族は不斷に周流する。けれども此周流の過程の行はるる傍らに、低級なる民族は漸次に、政治的經濟的過程によつて及び無意識の中に作用するところの人口學的過程によつて、滅亡するか、永久的なる壓迫の蔭に身を潜めつゝある。周流はつねに中庸なるものの上昇して優越者にとり代る過程である。中庸なるもののみが殘存する、私はかつてこれを、中庸殘存の法則と名づけた。たゞ此中庸なるものの如何にして成立するか、が問題となる。

民族の遺傳的素質の差異はもはや、社會學的考察にとつては、一の所與にして說明を要する事象ではない。これらの素質上の差異を有するものが、(a)種々なる外部的、ことに地理的環境の差異によつて、文化の發達の方向と程度とを異にする。(b)けれども更に重要なることは種々なる血統の混和である。種々なる民族の種々なる組合せによつて、雜多の遺傳的素質の多樣なる結合を生ずる。此混和は、一方に於て征服關係によつて生ずる。これは近代に於ては稀なる事象であるが、過去に於ては極めて頻繁であつたこと、いふまでもない。他方に於て、政治的交涉、ことに植民によつて生ずる。又、政治的壓迫を伴ふことなき通商、移住の結果として生ずる。此結合の結果は種々である。(1)文化、及び生理的特質のあまりにかけ離れたるものの結合は、一般に結果わるく、新しき文化を作り上ぐることもなく、勝れたる民族を作ることもないと見られる。けれ

ども、この主張については、吟味せらるべき點が多い。一方、この主張は、生物の雜種の類推に基いてゐる。このことが許さるべきや否や。他方、ホッテントット和蘭人の混血は相當に見るべき能力を示してゐるといふ事實などを考ふべきである。(2)文化や、生理的特質に於て中庸なるものの結合、ことに文化の系統に於て近きものの混和は、種々なる結果をうむ。これが常に必ず、優秀なる能力と優秀なる文化を生むとは云はれ得まい。その生理的素質だけについて見るに、長短相補ふところの結合と、さうでない結合とがあり得るわけである。而して後者はつぎつぎに、劣弱者の地位に立ち、人類歷史の表面から沒落したであらうし、今後とても沒落してゆくであらう。たゞ結合の好都合に行はれたるものは順次に選擇せられて、優越的地位を占むるに至るであらう。現在に於ける日本の地位、而して恐らくスラブの地位がかういふものであらう。南米や、南アフリカの中から、またかゝる將來を有するものの生れないとは斷言し得られない。

繰返して、所謂中庸殘存の法則といふものの根據を述べる。能力文化に於て割合に高き民族でなくては、優越せる民族の文化を十分に吸收し利用することは出來ぬであらう。而も、彼等は政治的組織によつて利益を奪はれ、經濟的に絞取せらるるなどの事情によつて、其生活は優越民族の如く高くない。而して恐らく人口の都市集中、乃至人口密度に於てもそれの如く大ではないはずである。その結果として、若し他の條件にして一樣であるならば、利益社會化の程度に於て遲れてゐるはずである。かくして、優越せる民族自體の凋落がはじまれば、之に取代るものは割合

に高き地位にあるもの、卽ち中庸なる民族より外にはない。かくして民族の周流に於て、次ぎ次ぎに高まりゆくものは、中庸なる民族ならざるを得ない。

二

利益社會化の各段階に於て、不斷に支配しつゝある傾向として、優越民族の代謝、中庸なるものの殘存をあげた。此外に重要なる一の傾向として、民族の擴大の法則をあげねばならぬ。此擴大の法則を說明する爲には、民族に對する國家の作用を繰返して述ぶることを必要とする。

前に述べたるが如く、根本に於て國家は民族を作る。作られたる民族は國家を求める。ところで、今までの歷史に徵する。國家が單一の民族によりて支へらるるときに、之を民族國家といふ。民族國家といへども、決して單純に又は純粹に同質的なる一民族より成ることを求むるのではない。今日のナチスの政策の如きは、國情あまりに急迫したる場合の變態である。國家が形成せらるるや、國家としての擴充を求める。本來民族自體がその擴充を求める、これは民族的自我がもつところの力の要求のあらはれである、云はゞ集團的なる力の意志の表現である。ところが、それが國家といふ組織を作り上ぐるに至るや、民族の力の要求はやがて此國家の要求にまで高め上げられる。而も支配者階級の力の要求がそれと混同し、これに助勢するに及びて、それは愈ゝ根づよきものとなる。根本に於て民族の要求と國家の要求とは相合し相蔽ふべき性質をもつものである。たゞある場合に於て、卽ち國家の意志決定に當る支配者階級の意志と民族の要求と

が一致せざる場合に於て、卽ち國民の多數が國家の要求を容認せざる場合に於て、それは相背馳すると見なければならぬ。とにかく、國家的なる勢力意志は、その征服によつて、併合によつて空間的に自ら擴大せむことを求め、その人口を增加せしめようとする、これが爲には勢ひ異民族を新に包括しなければならぬ。政治的統制による接觸、ことに外部の社會と自然とに對する協働、共同なる運命の遭逢、これらは異民族を同化せしめて新なる文化と性格とを作り、新なる民族に仕立てあげる。かくして國家は不斷に擴充して新なる民族國家たらうとする。ごとに重要なることには、異なれる民族が國家といふ統一的組織の下にあつて共同なる運命にであふごとに（例へば戰爭、天災、國際的大事變）、國家的なる自我がよびさまされ、國家的なる勢力意志が同樣に異民族の上に植ゑられる。このことが容易に民族の同化へと導く。

民族擴大の傾向は單に民族的、ひいて國家的なる自我擴充の要求から來るとのみは云ひがたい。產業界に於て大企業の支配が愈〻確立せられてゆくにも似たるものがある。經濟的に見ると一國の內部に相當に廣大なる市場をもち資源をもつことが、國民自身にとつて有利なることいふまでもない。此意味に於て狹少なる土地に割據する小民族は經濟の發達して大規模となるほど不便と不利とを感ずる。これは近代的國家形成の場合に顯著であつた事情である。別して、國家對立の場合に於て、小き國家は十分に自己の防衞をなしがたく、政治的にも壓迫せられ易い。ある大さの人口と地域とを有することが、其存立のための必要條件となる。かくて一の國家は勢力の

要求の爲に、獨立の國家をなし得ざる民族、又は民族の斷片を吸收するばかりではない、これらのものが自ら進みて、相當なる强さをもつところの國家に吸收せらるることを求めざるを得ざるに至る。而もかつては、國家の膨脹には若干とも技術的文化的なる障碍が多く置かれてあつた。今や、交通機關の極度なる發達、文化的同化の著しき進行の爲に、此障碍が愈々取除かれる。加之、一國がある程度までに人口的地域的擴大を遂げたることは、自ら他の國家をして對抗的に同樣なる努力に出でしめる。近代的大國家の自己擴張の努力は、此の如くにして理解し得らるべきである。

民族對立の間に於て、優越せる民族は亡び易い。而して餘りに劣弱なるものはまた滅亡する。かくして殘存するものは中庸なるものたらざるを得ない。而も、殘存するものの間にも自ら民族擴大の法則が作用するであらう。かくして民族の對立は、將來に於て愈々擴大せられたる、而も數に於て極めて小なる民族の對立とならざるを得ないであらう。而もその文化の程度や、產業軍事の力に於て益々極度にまで伸張せられたる、力相若けるものの對立とならざるを得ないであらう。近代の資本主義經濟に於ける獨占の現象に近きものが、國際間に於て成立せずとはいひがたいやうである。

たゞ國家の擴大が民族の擴大に導き難き場合がある。それは、國家があまりに素質と文化とのかけ離れたる民族を吸收し統一したる場合であり、又地域のあまりにかけ離れたるところを從屬

せしめたる場合である。此場合、血液の混和　文化の同化と云ふものの爲に著しき年月を要するであらうし、或は極めてその事が困難でもあらう。交通の不便の爲に一體としての行動が營まれがたく、ことに共同の運命に遭逢することが少い。かくして國家の力による大民族結成の作業が行はれがたい。近代歐洲各國の植民地分割の結果は概ねこれである。かゝる事情の下に於ては、植民地住民が本國の民族にまで吸收せられず、云はゞ熟したる果實の如くに離れる。たゞ國家擴大從つて民族擴大の作業が、近接せる民族、文化の程度や血緣に於て相近き民族に對して、行はるるときにのみ、それは比較的に容易に進行し得る。

民族擴大の努力は極めて屢〻文化の名に於て行はれる。國家自體はつねに權力の組織であるから、國家の自己擴張の努力はつねに外部的壓迫によつて行はれる。然れども國家は、出來るだけその行動に對する周圍の反對を和らげ、云はゞ美しき名義の爲に之を行はむことを欲する。自己の文化、例へば歐羅巴の文化、獨逸の文化、アメリカのデモクラシイの如きはすべてかゝる目的の爲に選ばれたる名稱である。勿論これは、其國家又は民族が意識的に虛僞を標榜するといふのではない。彼等は衷心からさう信じてゐる場合も多いであらう。けれども結局に於て、これらは彼等の自己被覆である。文化と道義とを標榜して、其實は民族的なる、乃至國家的なる勢力要求の充足を求むるに外ならぬ。何れの國家も同樣なる要求をもつが故に、又國家に對しては個人に對するが如くに道德が要求せられざるが故に、此自己被覆は何人もこれをはぎとらうとしない。

文化的民族主義は其實、民族の勢力擴張主義の假面である。

三

利益社會化の大勢が音もなく進行してゆきつゝある間に、其各段階をとつて考ふれば、民族の對立に基く事象は不斷に行はれつゝある。此不斷なる反覆、それは何を意味するか、上に述べたるところによれば、優越せる民族の衰頽、中庸なるものの殘存、ならびに、民族擴大の傾向である。これらの過程によつて殘存せる各民族間の文化の程度、生理的素質の間の開きは漸次に縮小するばかりでなく、一の民族の大きさは愈〻大に、それらの數は愈〻小とならうとする。

殘存する大民族間に利益社會化の工作が加はつてゆく。各民族の共同社會的結合は見えざる間に若干ともゆるめられ、それにつれて各民族に屬する個人は互に一歩づゝ接觸をつよめ、結合と理解との程度を深めてゆく。最も注目すべきものは、交通機關の發達であり、文化的同化であり、ことに機械的生産の進行である。交通機關の發達したる結果として今日の世界は三百年以前の一國の如くに縮められた。その限り各民族の成員間の利害の關係も錯綜して來る、個性の分化につれて個人的なる親和も加はつて來る。これにつれて血液の混和とても必ずや進行するであらう。更に重要なることには、各民族間の文化的同化が必ず進行する。もとより舊き、各民族固有の文化は容易に消失するものではないけれども、互に融通し滲透して、共通なる內容を愈〻多くするに至るであらうことは、いふまでもない。ことに機械が自然の力を壓迫すればするほど、す

べての文化內容を條件づけ、ある程度まで其性質を左右するところの物質的準備が相近きものとなる。かくて利益社會化につれて。各民族內部の個人は相接近する。勿論、民族といふ集團の自我は中々に亡びず、互に其勢力の伸張の爲に對立しようとする。けれども個人間の接觸別して個人相互の愛着と利益とは民族を結ばうとする。加之、民族の對立を緩和せしむる方向に對して作用するものがある。利益社會化の大勢は個人の集團に對する犧牲の傾向を弱めてゆく、此內部の結合がゆるむほど、外部との關係は深刻なる敵對にまで高まり得ない。內部の利益社會化そのものは、民族の對立そのものを緩和する傾向をもつこと、爭ひがたい。民族の融合の形勢が個人の相互作用の間に默々として進行しつゝあることを否定しがたい。

此見方は利益社會化の究極に世界的民族をおく。これが完全なる實現は考へ得る近き將來のことではない、けれども事象の內部に動きつゝある傾向の方針は卽ちそこである。此見解は、民族の對立を以て人類の歷史そのものから離れず、取り除かれないと見る見解に對立する。歷史を以て世界史的民族の交代の歷史であるとは見得ない。現に近代の世界の歷史は、幾つかの民族が平行的に特有なる文化を展開せしめつゝある歷史である。將來、民族の擴大がすゝみ、中庸なるものの殘存がすゝめば、殘存する民族によつて優越の交代をつゞくることが、出來なくなるはずであらう。

もとより、「利益社會化の進行に拘はらず、今日の各民族のもつところの文化的個性は決して消

滅せず、その限り民族的團結は失はれない、むしろ、各民族がそれぞれ特有なる文化を築き上ぐるところに、人類又は世界の文化が高められてゆく、人類の文化的向上といふのは各文化の特有なる個性の發揮以外のものではなからう。」と考ふることも、一應の道理はあるけれども、各民族のもつ文化の個性がどこまでの根强さのものであるか、之を完全に取除くことは出來ぬが、それは民族といふ、自足的生活共同を求むるだけの集團を作り上ぐるほどのものか。そこで問題は、國家といふが如き政治的組織と民族との相互作用にうつつてゆく。

民族が國家を求むることは明である。而も根本に於て民族を作るものが國家であることも明である。此意味に於て、國家は民族を支へ、政治は民族を鑄造す。從つて民族の個性といふものは政治組織の作用にとつては究局に於て、從屬的のものであると見ざるを得ない。そこで問題は國家(又はこれと同一の機能を營むもの——其名稱は如何ともあれ)が世界全體に亙つて成立し得るものであるか、否か、といふことに歸着するであらう。而も、國家自體の擴大の傾向が作用してゐることは、前述の如くである。他方に於て、現實の世界的なる事態、ことに經濟、技術、交通學問等に於ける事態は、統一せる管理、世界全體に亙る統制を必要とすること、卽ちこれを缺く上の不便を感ぜしむること、愈々深い。民族對立の現狀が各國家の孤立的傾向を助長しつゝある現在とても、このことは爭ひがたいであらう。蓋し、世界交通の今日の如く便利となり頻繁となつた場合に於ては、種々なる國家間民族間の交涉は昔日に於て一國の內部に於けるが如く密にな

らむとしつゝある。此事情からして、世界的國家の形成が事態そのものから要求せらるるのではないか。勿論このことは、今日の國家が解體して一擧にして世界的國家に進むことを意味するのでもない、又國際聯盟の組織がそのまゝ强化せられて超國家的なる世界的國家となるといふのでもない。むしろ擴大してゆく國家の、事實上の相互的勢力を基礎とする聯合が進行して、遂に世界を統一する國家にまで進行するものと思はれる。けれども、究局に於て此世界的國家の成立し得ず、と斷定しうべき根據は何物もなく、而もその方向に向つて動くと見るべき傾向は、あまりに明確に存する。

此の如くにして、世界的國家が成立する傾向があり、而もそれが成立すると自己の組織を愈々强化しゆく傾向ありとするならば、それは自ら世界全體を通ずる民族を鑄造しようと努力するであらうし、又長い時期のうちには此鑄造の過程が進行するであらう。その時、各地方、又は各部族の個性は、傳統、風土の事情によつてなほ殘存するにはする。けれどもそのとき、所謂、自足的なる生活共同を求むる意識を伴ふところの集團としての民族が、殘存するとは考へがたいのではないか。ヲオドの如きは、世界各民族の血液の混和が究局世界を一體とする團結にまで導くと考へる。勿論、自發的個人的なる血液文化の同化作用は高調せられねばならぬであらうが、國家の民族に及ぼす作用は、更に强力のものではなからうか。

けれども、此世界を通ずる「自足的完全集團」の形成を近き將來に置かうとするマルクス・エン

ゲルスの見解は餘りに距離を見誤つてゐないであらうか。『諸國民の民族的分立及び軋轢は、既にブルジョアジイの發達に伴ひ、商業上の自由に伴ひ、又世界市場に伴ひ、そして又工業上の生産とそれに相應ずる生活關係の均一化につれて、次第次第に消滅する。プロレタリアアトが支配するやうになれば、さういふものは、更に一層速に消滅するであらう(共產黨宣言)。』而して國內に於ける絞取がなくなるならば、それにつれて民族間の絞取も亦なくなるであらう、說かれてゐる。けれども、民族の對立が資本主義經濟の發達につれて弱まり、無產者の支配によつてやがては消滅するかに見るのは、事態を餘りに單純に見たものではないか。もとよりマルクス・エンゲルスの民族觀については、他の解釋を加ふべき餘地があると認められてゐる。卽ち無產者が支配者の地位に高まるに至つて民族にまで高まり、祖國をもつに至るであらうといふこと、これである。けれども、其思想の根本の調子から見て、民族の消滅を遠からざる將來に認めたといひうるではなからうか。

國際的同化につれて、やがては民族文化の特性、從つて民族の個性が失はれ、國內の階級對立の撤廢によつて民族間の軋轢絞取が除かるると見るのは、現實の動きをあまりに輕視してゐないであらうか。異なれる民族の間から一の民族の形成せらるることは、少くも歷史の示すところによると、自發的過程、卽ち個人相互の交通だけからは起り得てゐない。必ずや、國家の統制をまつてゐる。從つて、單に資本主義經濟に於ける相互交通、無產者國家間の接觸だけから、それが

生ずるとは遂に考へ得られないことである。ことに況や、國内に於ける絞取の取除きがやがて民族の對立を取除くとは考へ得ない。マルクス・エンゲルス自らによるも　今の無產者は祖國をもたぬ　けれども無產者が支配者にまで高まれば自らを民族にまで構成するといつてゐる。また、英吉利民族の世界に於ける資本家的地位について語つてゐる。世界的國家の形成をまたずして民族の個性が失はれうると考ふるのは、事態を見誤つてゐないであらうか。ことに、一國内部に於ける無產者が政治的支配に高まることによつて、やがて民族間の絞取が除かれると見うべき論據は少い　英吉利民族の生活上の地位が、勞働者に至るまで一種の民族的絞取を行つてゐるといふ事實の上に立つてゐるときに、無產者が支配者にまで高まり上ることによつて、直に此絞取者の地位をすて去るであらうか。無產者はそれによつて自らを民族にまで構成するのではないか。それだけから、民族的絞取の除かるる理由はないと思はれる。

四

社會の進みは、一方に於て利益社會化の過程であり、他方に於て、民族の競爭淘汰の過程であるが、此二は、前者の各段階の中に於て後者が行はるるといふだけのものであり、二者は孤立し切りはなされたる過程であるかといふと、さうではない。われらは民族の競爭對立の中に於て、利益社會化への動きを見得ないであらうか。此對立に基く競爭は、いふまでもなく、常に經濟的資力の充實を求め、人口の增加、社會範圍の擴大、ひいては人口密度の增加を求める。それが社

會の利益社會化を來し、文化內容をして愈〻利益社會の色彩を强からしむること、上に述べたるが如くである。勿論、優越せる文化をもつものはやがて衰滅しようとする。けれども、此文化そのものは、從屬的地位にある民族の上に傳へられ、それの中に滲透するであらう。優秀なりと見らるる文化が一種の威光(プレスティヂ)をもち、この威光がそれの流下に役立つことは、周知の事實である。民族の對立競爭そのことは、共同社會的なるものの殘存といふ結果に導くにしても、やがてまた、利益社會化への動きを刺激することも爭はれがたい。遠き將來の世界的利益社會を作る爲には、共同社會的傾向をもてる人間材料を選擇しようとする、これを以て利益社會といふ姿を畫くための工程は、此選擇自體によつても進められてゐる。神の意匠がありとすれば、かく表現すべきであらう。

さて、利益社會化の動きは如何なる步調を以て進むのであらうか。それが單調なる一方向への漸次的進行であると見ては、理解しがたい事實があまにり多い。それは、一種の波動を營みつゝ前進する、と見らるべきではないか。これについて、近時の世界的狀勢が一の問題をなげかけてゐる。

今日、政治の上に於ては獨裁政治、經濟の上に於ては、統制的傾向、國際的には對立の狀勢が强まつてゐる。而して一派の人人の見方からいへば、過去の自由主義的なる政治と經濟は、資本主義のいはゞ上昇的過程にあつた狀勢に應ずるものである。資本主義經濟が今や、下降の方向に

轉じたる場合に於て、自由主義は此新狀勢に應じ得ない。今や、政治も、また經濟もすつかり方向を轉換すべき時期に入つてゐる。かういふ見解は、世界歷史の進行が今までの自由主義から其方針を轉じて、いはゞ全く新しき段階に入つたと見るのである。

私は此點について、次の如き見方をもちつゞけてゐる。世界の動きは根本に於て利益社會への動きである。而して、これは一面から見て自由主義的なるものと表現して差支はない。個人の獨立の加はることを自由といふ名を以て表はすならば、利益社會化はその意味に於ける自由への動きである。ところで、最近世界は全く其方向を轉じたと見るべきであらうか。なるほど、議會政治の影はうすくなり、經濟は統制の色彩をこくした。けれども、今の立場からはそれが次の如くに解せられねばならぬと思ふ。

最近の狀勢はすべて戰後の不況の結果として說明し得らるべきである。此不況による打擊から免るる方法としては、國內に於て獨裁政治をとることの必要が感ぜられる。同時に、經濟の上にも統制が要望せられる。此點の仔細に立入ることは、今の意圖ではない。けれども、これは一方に於て持續的のものであるか、他方に於て自由主義の廢棄を意味するものであるか。

今日の不況は世界戰爭の結果として說明すべきものであると信ずる。さう考ふるときには、此不況もやがては克服せらるるものと思はれる。進みて實質的に云へば、主として貨幣組織の改革によつて、此克服が實現せらるるものと考へられる。これが實現せらるる場合に於ては、國內に

於ける獨裁强制も緩和せらるるであらう。政治に於ける自由は自らに恢復せられてゆくであらう。國際關係の緊張も漸次にゆるめられると思はれる。此點から考へると、國內に於ける獨裁、國際に於ける對立といふ現時の逼迫したる狀勢は、これを作り上げたる狀勢の變化とともに取除かれ、世界はまた再び、その利益社會化の進路を默々として進むであらう。此意味に於て、世界の動きが全く其方向を變した、と見る見解は、此一時なる姿を以て永續的なるものとなすに外ならぬ。もとより資本主義そのものの發展してゆく傾向からすると、國家の經濟的機能が減少してゆくとは考へられぬ。否、そればかりでなく、國家機能は、社會生活のあらゆる方面に亙つて愈々擴張せられゆくと思はれる。

けれども、このことは、一概に、自由主義の退却、社會進路の轉向を意味するものではなからう。社會生活に於ける國家的統制、乃至國家的機能負擔の必要又は限度は、經濟の狀勢、文化の段階、對外の關係、若くは對自然の關係等によつて、種々に變化してゆくであらう。此際いかに、社會の利益社會化が進行し、個々の人格が自己目的として取扱はるるに至るからとて、此統制、乃至、國家機能が取除かるるはずはない。要は、個人的自由と社會的乃至組織的自由とを區別するにある。

資本主義の發達が經濟的統制を必要とするにしても、それによつてなるほど、個人的卽ち民事的自由は減少するであらう。而も統制の組織そのものに於ける自由が十分に保障せらるるならば、

社會的自由の作用する範圍が、それだけ加はつたのに外ならぬ事になる。組織そのものが愈〻成員の自由の上に築かるるに至るならば、社會的自由は伸張する。而して此組織による統制の範圍の加はることは、ある生活方面が個人的自由から社會的自由の中に移さるることと見られうる。此意味に於て、利益社會の進みが不斷であるが如く、此の如く廣義に解したる自由もまた、不斷に伸長せられてゆく。

今までの叙述は現在の段階を中心として述べてきたのであるが、更に長期に亙ることを考へて見よう。利益社會化の進行は決して單調なる前進をつゞくるものではない。自然界に於てすら、複雜なる現實の動きは常に律動をなしつゝ進行する。氣溫の上昇下降は日を追うて順次に行はれず、或は上り過ぎてはもどり、下りすぎてはもどる。利益社會化の進みとても、一種の循環的波浪的段階を辿りつゝ進むのであらう。社會が上に述べたるが如き進路を進むに當つて、常に二の傾向又は方針の對立してゐるのを見る。一は遠心的なるそれであり、他は求心的なるそれである。前者は個人中心的分散的であり、後者は集團、別して民族中心的であり、團結の鞏固を目標とする。卽ち一は共同社會化の方向であり、他は利益社會化の方向である、と表現しても差支はないであらう。歷史の動きは、此二の大なる傾向の交代であるといふ見方がある。私は此見解が次の意味に於て正しいと思つてゐる。

利益社會化は社會發達の過程を貫いてゐる方向である。けれどもそれは、波浪狀態を呈して進

むが故に、ある段階のみをとつて考ふれば、又は此根本の大勢を切りはなして考ふるときには、二の傾向の振子運動として考へられ得る。更に進みて考ふるに、此振子運動がこ二の種類に分たれ得る。

優越的地位を占めたる民族が、少くも其支配階級の部分に於て、利益社會化の道を急ぎ、其結果として沒落したる場合、取り代れる民族はなほ著しく共同社會的なるものであらう。かゝる事情の下に於ては、利益社會的なるものと共同社會的なるものとの交代がある。次に此共同社會的なるものは、またそれ自體、利益社會化する。こゝにも他の一の交代がある。これは一の根本的なる交代である。けれどもなほ他の一の交代がある。

一の民族がその利益社會化の道を進む場合に於ても、そこには必然的なる律動があるであらう。社會の狀勢に從つて、利益社會の色彩が愈〻加はつてゆく場合に於て、二の事象が生ずる。一は其傾向が規範化することである。これは固定的なる法律の內容となり、又は道德の內容とまでなることはないにしても、一代の思潮、又は運動の形に於て、愈〻誇張せられ、各人をその方向に强要し、まきこまうとする。次に一部分の集團的勢力がこれを利用して、自己の勢力擴張の機會に供しようとする。かゝる事情の爲に、此傾向そのものは拍車をかけられて、社會の自然的なる、卽ちかゝる助長的事情のない場合以上に進む。此行き過ぎは早晩もどらざるを得ない。卽ちそれは必ずや、民族の立場を危くし、又は何等かの文化內容の發展、生活の充實を阻碍する傾

をもつであらう。卽ち、社會の狀勢が利益社會化の動きを生むにしても、此傾向が强くなりすぎると、社會の狀勢がこれを認容し得なくなる。そこで、やがてはこれを逆の方向に轉ぜしめようとする努力、傾向を生ずる。此傾向は常に民族の團結をつよめ、その立場を有利ならしめようとするところの、いはゞ共同社會化的なるものである。而も此傾向もまた、傳統の力と相俟て規範化し、且つ社會の一部分のものの優越の要求の爲に利用せらるるに及び、必ず行きすぎる。而して、民族內部に於けるある勢力、又は民衆の利益や要求を、あまりに强く壓迫することとならざるを得ぬ。そのことが一の反動をもたらす。周圍の事情、ことに國際狀勢の變化が此反動の程度、時期の上に作用することは、いふまでもない。

何れにせよ、此二の傾向は規範化の作用によつて、換言すれば集團意識の作用によつて、また、部分の勢力の要求によつて、必然的にゆきすぎる。かくして、利益社會化の過程は一律にして圓滑なる進行に非ず、かゝる振子運動を其中に含まざるを得ぬ。これだけの說明によつて、現實に於ける利益社會化の進行が波動をなしてのみ行はるることも、理解し得らるることと思はれる。

（昭和十年五月初旬）